



TITLE:

西欧の大学図書館建築印象記

AUTHOR(S):

倉橋, 英逸

CITATION:

倉橋, 英逸. 西欧の大学図書館建築印象記. 静脩 1980, 17(1): 2-4

ISSUE DATE:

1980-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36865>

RIGHT:

だきたい。なお本館の2階の参考室カウンターには常時職員を配置し、図書館（室）及び図書の利用に関するあらゆる質問を待っているし、1階にある全学総合目録（カード）により必要とする図書が学内のどの図書（館）室にあるかが一目でわかるようになっている。かくしてできるだけ多くの図書をうまく利用する技術を一日も早く自分のものにしてほしいと願うものである。諸君の京大生活の充実度は、本学の図書施設を如何にうまく利用するかによって相当に左右されるものと確信しているからである。

○附属図書館の施設について

さて、本館の建物は、御覧の通り大変古ぼけており、他大学に比べて遜色がない、とはお世辞にもいえないだろう。何しろこの建物は、太平洋戦争の始まった昭和16年に起工され、戦争中は物資不足のため工事中止、戦後の昭和23年にやっと完成したものである。以後30年、激増する図書、雑誌などの情報資料を蒐集し、学生や教官に対して効率よく提供するという現代的図書館の任務を十分に果たすことは、年毎に困難の度を加えているというのが実情である。しかし、そのような状況の中でも、本館は諸君の学習室としての役割りを

も果たすべく、冷房装置の設置、「開架図書」の充実拡大にも力をいれてきた。また文献複写室、雑誌室、新聞閲覧室を設け、さらに参考室には、内外の書誌、目録、索引、辞書、事典、年鑑、ハンドブック類を網羅して諸君の自由な閲覧に供している。

なお、2階大閲覧室の「開架図書」の中に「指定書」と呼ばれる図書があることは、前にも述べたとおりであるが、これは各学部の教官により、是非読んで欲しいという意味で指定されたものである。一方、諸君が「どうしてもこの本を備えて欲しい」と希望するものがあれば、所定の用紙に記入して提案することができる。朝9時から夜9時まで、本館を大いに利用していただきたい。

○おわりに

現在、本館をもっと利用し易く、現代の情報化時代にマッチしたものに建てかえようという動きが推められているが、諸君が3・4年生になり、或は大学院生になって、各専攻学部の図書室を利用することになっても、本館をいつでも利用できることを附言しておきたい。

西 欧 の 大 学 図 書 館 建 築 印 象 記

京都大学附属図書館 整理課長 倉 橋 英 逸

一昨年暮、西欧では英国と西ドイツの大学図書館を視察したので、その大学図書館建築について素人の印象を簡単に述べたい。

英国のロンドン郊外にあるオックスフォード大学は、大学全体が保存建物に指定されており、外観の変更は許されていない。この大学の中央図書館であるボードリアン図書館は、戦後、蔵書の増大によって増築の必要を迫られたが、周囲に建物があり、隣接して新館を建てることができなかった。そこで、建物をつつ挟んで新館を建て、これと旧館とを地下にベルト・コンベアで結び、旧館を閲覧室、新館を書庫として利用している。

一般に西欧人は息が長く、グリムの独語辞典や

フランス国立図書館の蔵書目録が19世紀からABC順に継続して刊行されているのと同様に建物の耐用年数に対する感覚も我々日本人と較べて比較にならない程長いように思われる。西欧の都市の街を歩いていると、公共的な建物だけではなく、民間の建物に於いても、古い建物を改装していつまでも大事に使っているのが見受けられるが、オックスフォード大学のボードリアン図書館も1602年に建てられて以来、400年近くも現役で働いていることになり、驚くほかない。

新しい大学図書館建築としては、スコットランドのエディンバラ大学の中央図書館が1967年に建てられ、地上7階、地下1階、総面積約3万平方

米の規模を誇り、完全なモジュラー・システムによって設計している。

モジュラー・システムは米国の図書館学者メトカフが完成させた図書館建築設計思想であり、簡単に言えば、図書館はたえず変化・成長するものであり、それに合わせて建物自体も成長できるようにし、内部の機能の変化に合わせて対応できるように融通性をもたせようとする考え方である。従来の西欧の建物が主に壁で建物の重量を支えるように設計されていたために、壁を取り去って増築することができず、また、内部の壁を移動して模様替えをすることも困難であったので、柱間隔を一定にし、柱だけで建物を支え、床は、閲覧室にも書庫にも転用できるように予め耐荷重性を高くしておこうとするものである。

エディンバラ大学の中央図書館は余りにも大きいために玄関部分だけは吹き抜きにし、全体との調和を保たせているが、このほかに吹き抜きは全くない。各階には同じ位置に階段と便所を一つにしたコアを三つ、等間隔にやや南側寄りの一直線上に配置した単純な設計である。書架や閲覧机がない状態では、工場のように殺風景ではないかと想像された。事実、この単調さを救うために、書架や閲覧机の配置に変化をもたせ、それでも足りず、あちこちにカーテンや衝立を置き、それらに色彩の工夫をこらして、単調さを減らしていた。

将来の増築を見込んで建てられた大学図書館としては、同じくスコットランドのグラスゴー大学の中央図書館がある。この図書館は1968年に建てられ、地上9階、地下3階、総面積約1万6千平方メートルの規模であるが、建物の裏側は鉄筋が露出し壁面の部分はパネル状の簡易壁がはめられ、容易に取りはずしすることができるようになっていた。

英国の中央部にあるノッティンガム大学の中央図書館は、1972年に建てられ、地上3階、地下1階、総面積約1万2千平方メートルの規模である。コア部分は各階同じ位置に二つ、中心よりやや片側寄りに一直線に配置されているので、正面玄関を入って行くと、右手に階段があるようになっていく。コアを建物の中心に置くと、空間の利用が単調になるからであると思われる。この図書館も完

全なモジュラー・システムによって設計されており、建物の中心に立つと、四方の外の景色が見られ、非常に明るい感じがした。吹き抜きは全く用いていないが、舟底天井を数多く並べたような天井が、照明効果もあって、心理的に高く感じさせるような設計であった。吹き抜きを無くすることによって融通性を高め、同時に天井の工夫によって、圧迫感もなくすという両方の効果をねらったものと思われる。利用部門と事務部門との仕切りも簡単なもので、見透しがきき、館長室も取りはずし可能な囲いがしてあるだけで、いかに徹底したモジュラー・システムであるかが理解される。この建物を見ていると、設計において、まず、全体の必要面積を算定し、階層およびコアの位置を決め、これによって建物を造り、最後に各部屋の割り振りをしたのではないかとさえ感じられた。

メトカフのもう一つの考え方は人工照明の重視である。これは従来、欧州の建物は太陽光線を多く取り入れるために天井を高くし、建物の巾を狭くしていたが、建物の巾を狭くすると、模様替等の融通性がなくなるので、建物の間口と奥行きとの長さの差を少なくし、それに伴う採光不足は人工光線に頼るという考えである。この考え方を徹底すれば、天井が低い程照明効果が良いということになる。ノッティンガム大学の中央図書館もこの考え方に従っており、更に英国では、大学図書館建築の冷暖房効率を高めるために外壁面の窓の総面積の大きさを制限しているということで、2階と3階の窓は小さくしてあるので、その開架閲覧室はほとんど人工光線に頼っている。

英国西南部にあるブリストル大学の中央図書館は1975年に建てられ、地上3階、地下1階でノッティンガム大学の中央図書館と同じ程度の規模であるが、英国の経済状態を反映しているということで、天井も低く、2階及び3階の窓はノッティンガム大学図書館のそれよりも更に小さくなり、冷房装置もなかった。夏はさぞ暑いだろうと想像したが、夜間、送風機を回し、建物を冷やすとのことであった。英国の夏は日本ほど蒸し暑くないのであろうか。この図書館も“メトカフの理論通りに造った。”とのことで、完全なモジュラー・

システムによって設計されていた。

日本に於いても、モジュラー・システムの理論が紹介されて久しく、続々として大学図書館が建てられているが、英国のように徹底的なモジュラー・システムによって設計された図書館はほとんどないように見受けられる。その理由は、モジュラー・システムでは建物の構造が単調になり、コストが高くなるからであり、消防法等による規制が厳しいことによるものと思われる。コスト高については、当初閲覧室に予定する場所でも、将来書架を置くことを想定して床の強度を強くしなければならず、配線・配管も将来の変化のために余計な投資をしなければならぬことに原因する。しかし、京都大学附属図書館は建設以来33年しか経っていないが、従来の閲覧室の床強度が弱いために開架図書や参考図書を十分に置くことができず利用者に大変ご迷惑をかけていることから考えても、大学図書館の将来の機能の変化を十分に考慮することは非常に大切なことであると思われる。

西ドイツでは、伝統のあるフランクフルト大学と戦後に新設されたボッフム大学及びビーレフェルト大学を訪れた。

フランクフルト大学の中央図書館は公共図書館をも兼ねており、第二次大戦直後に建てられたので特に建物としての特色はないが、伝統ある大学として、数多くある部局図書室との連絡・調整が今後の大きな課題であるとのことであった。

デュッセルドルフの東部にあるボックム大学は、郊外電車の駅から真直に行くくと、大学のメイン・ストリートに入り、それが大学の中央を貫いている。筑波大学と同じように地表は車道と駐車場になっており、歩行は原則として陸橋によって行われているので、中央図書館と講堂はこの通路の真上に向い合って配置されている。このように図書館が大学の中央に位置付けられていることにこの大学の図書館に対する考え方が表われているような気がした。この図書館は1975年に建てられ、地上6階、地下1階の壮大な建物である。建物の中央にらせん状の階段が配置されており、建物の周囲の窓側を閲覧室にし、階段と閲覧室に挟まれた部分を開架書庫とするのが基本的な設計で

ある。この書庫2層分が閲覧室の天井の高さになっており、利用者は書架から自由に本を手にとり閲覧できるようになっている。このような閲覧室が各主題毎にあり、各主題毎に図書館員を配置しているので、人手も多く必要であり、天井が高く、窓も広いので、冷暖房効率も悪いと思われ、自然光線を人工光線よりも優先させて採光していることは、英国の場合と全く逆であり、この違いが何に起因するのか興味ある問題である。

ボッフム大学の近くにあるビーレフェルト大学は1966年に創立された大学であるが、この大学の特徴は大学全体が一つの建物の中に入っていることである。外から見ると巨大な工場のような建物の中央をメイン・ストリートが貫き、1階は管理・厚生部門の設備が置かれ、このメイン・ストリートは2階まで吹き抜きになって、その両側の2階全体が図書館となっている。従って、図書館はメイン・ストリートを挟んで二本の帯状に長く延びており、端から端まで行くのに自転車が必要であると言われる位である。この図書館は各専門分野毎の図書室に区切られ、各々に図書館員を配して、貸出や参考業務を行っている。3階以上は研究棟となっており、研究者は各々の専門分野に該当する図書室に真直に行くことができるようになっており、非常にユニークな図書館となっている。この図書館も大学の中心に置かれ、天井が高く、窓も大きく、自然光線の採光に十分な配慮が加えられていた。将来の成長については、余裕の空間がふんだんにあり、当分は手狭になることはないと思われた。

英国と西ドイツの大学図書館を訪れ、今さらながら「所変れば品変る」の感を強くしたが、国状が異なるのだから当然のことかも知れない。現在、京都大学附属図書館としても新館の建設に向けて努力しているが、やはり日本の風土、大学の組織、部局図書館との関係、教育・研究の方法等大学の実状に合った大学図書館を考えてゆくのが我々の使命であろう。